特別寄稿

南　正　遭難顛末

南　正　君略歴

・昭和8年10月28日生
・昭和23年7月　　大台ケ原登山
・昭和26年4月　　大阪府立池田高校入学　　山岳部入部
・昭和26年より昭和27年までに和泉葛城、剣尾山、愛宕山に行く
・昭和27年　　OB有志でPPC結成
・昭和27年8月　　比良山縦走
・昭和28年4月　　西京大学入学。　　山岳部入部
・昭和28年5月30～31日　　山岳部主催比良登山（新入生歓迎会）
・昭和28年6月6日　　金比羅山（岩登り練習）
・昭和28年7月16日～18日　　夏山一般登山に参加（富士山）
・昭和28年7月20～8月10日　　松本営林署、有明担当区で高山植物巡視に従事
・昭和28年8月19日　　越中沢山附近にて落雷にうたれ遭難

遭難の模様

池田高校山岳部OB　阪　井　邦　夫

昭和28年8月10日、南君は営林署のアルバイト（西京大学の斡旋）の後、松本にて池田高校OBの阪井、千葉と合流し、大町より針ノ木峠を越えて平の渡に至り、ここで悪天候の為一日停滞後。五色ケ原に至りここでも台風により二日停滞。

8月17日天候回復後の様子が見えたので南へ向って出発したが、スゴ小舎に至る迄に天候悪化、スゴ小舎にて一日停滞。

8月19日朝5時40分に出発して五色に引返す事になり遂に予定の槍穂高迄のコースを断念する事となった。小舎を出て約1時間、越中沢山にかかる頃より雨激しく雷を聞く。二度目の落雷が比較的近かったので一同ピッケルを抜取り脇に抱えて歩き出した。5分か10分ぐらい歩いた時、落雷に会ったらしく一同失神する。この時南正君は即死、千葉は5～6m 下の這松迄吹っ飛ばされた。この一行に五色より同行していた中京山岳会稲垣氏は末尾を歩いていた為割合軽傷ですぐに五色小舎に救援を求める為に出発、阪井、千葉はテントを張ってその場に残った。千葉は全身感電により神経マヒのため歩行不能、ラジュースを点けてマッサージする事一時間半で何とか立てる様にまで知覚が取戻せたので千葉、阪井も五色に向う。千葉の様子は歩くに従って良くなり五色ケ原に入る頃には一応全神経回復した。

一方五色小舎より室堂に人を派して家族に連絡する外、すぐに救援隊を組織し現場に向う途中千葉、阪井を収容、更に南正君の死を確認するため現場に向った。千葉、阪井は救援隊と別れて独力五色小舎に到着した。

翌日報せを受けた家族側では直ぐに池田高校OB、西京大学山岳部と共に富山に向い、千葉の姉及び親戚の武田氏、西京大の武居氏、片岡氏、小川氏、池田高校OB久原氏、長谷川氏、森本氏、川崎氏ら五色ケ原に急行。

麓の栗巣野に南正君両親及び阪井の父が到着した。

22日現場にて荼毘に付し、23日五色ケ原出発、24日大阪に帰った。

尚翌29年7月22日先行した片岡氏、小川氏と五色ケ原にて合流した池田高校OBグループは現場に遭難碑を建てた。

特別寄稿

“カミナリピッケル” 由来 **武 居 三 郎**

南と云っても、即に知ってる居る部員も居なくなった今日、彼の事を書き留め、あのピッケルの由来を残しておくのも無駄ではあるまい。今後も彼について述べられることもないだろう。

南が入学した1953年頃と云へば、山岳部は現在の様にしっかりした形を整えて居らず、部員もC．L武居の外10名内外、しかも実動し得るものは数名と云うさびしさであった。4月に小川、南の新入部員を迎えて、いよいよ本格的に部としての活動を開始した。藤田（3回）等を加えて初めて狐岩へ岩登りに出かけたのもこの年の6月だし、金比羅へも初めて部として出かけている。この様にやっと活動を始めた部にとっては一人でも南の様な活動的な愉快な仲間が居ることは非常に心強いものであった。しかしながら、夏山に於ても未だ合宿をする程の力もなく、装備もない我々は7月16日～20日の夏山一般登山を富士山で済まして後、武居、小川、南の3名で松本営林署の巡視のアルバイトに行き山の生活になれる事にした。

7月16日夜行で出発した92名の一行はC．L武居、L森本達夫、下志万、南、で富士宮より登山し17日は台風の突風下を L.3 名が蒐印の為に頂上へ往復、途中3人共吹き飛ばされる様な目に会いながら夕刻風の治まったすきに下山、全員無事に御殿場に下山した。この間、南は常に愉快に皆を笑わせ、13貫程の小身に拘はらず、16貫程の女性を担ぎ上げる等、非常に良く動いてくれた。下山後東京で 1 泊し、ナーゲル靴（未だビブラムのない頃）で銀座を闊歩し、意気洋々と松本に向った。ここで各人営林署担当区に配属され、南は有明担当区へ行ったが、本来の目的である巡視には行かず苗甫で杉の草抜きに酷使されて、8月10日再び松本で逢った時は相当に立腹して居た。そして有明に居るうちに、高校時代の友人と、この鬱憤を晴らすべく、針の木より五色→五郎→槍の当時の食糧難や道の悪さ等を考へれば大計画を立て、我々との計画を放棄して10日夜松本駅で泊り、11 日に出発して行った。

ところが、我々が上高地に遊び、小松教授等と雨の白馬で苦労して19日下山帰京し彼の事を語って居ると、20日早朝、新聞社より南が五色附近で遭難したとの悲報に接し、取るも取りあえず登校し、同夜、武居、片岡、小川の3名で救援に向った。しかし詳報が入らず、何処で何故、何時、そして生死も全く解って居ず、結局21日夜、五色の小舎で、雷により死亡したことを知ったのである。

それによると16日に五色小舎を出発した南等3名は、スゴ小舎で19日迄停滞し、食糧不足の為縦走をあきらめて、20日早朝五色に引き返すべく出発した。霧深く、小雨がパラつく中で、スゴ乗越最低鞍部に差しかかると、遠雷が太郎の方でとどろいた。早速、買ったばかりのピッケルを背中より手に持ちかえて、雷が近付いたら放棄すべく用意し、立ち上って第一歩をふみ出した瞬間、全く突然に、第二発目の雷が二番目の南の頭上に落下し、他の二名と、名古屋の千葉は激しいショックを受け地面にたたきつけられ、打撲と火傷で各々重軽傷を受けてしまった。千葉等は膝で這って、トビ、ワシを越へて五色へ急を告げ立山の医者が来た時は既に、2日を経過して居たし、即死した南に何の施す術もなかった。

我々救援隊が現地に着いた時は、彼はふせて横たはり、両手でしっかりとあのピッケルを握って居たのである。現地で火葬にした遺骨と遺品を持った救援隊と負傷者は、ザラ峠を下り、雨で荒れた湯川谷を下って23日、父母に迎えられて栗巣野へ下山し翌24日に京都へ帰った。

8月31日悲しみの葬式を終えたが、あのピッケルを見る毎に、おしいやつを失ったと思うのである。

註）故南氏のピッケルは我部に寄贈され“カミナリ”の愛称と共に部員に親しまれている。